

夢野久作「押絵の奇蹟」の二都市

― モチーフをめぐる考察 ―

村上 日佳里

一 はじめに

夢野久作「押絵の奇蹟」は、一九二九年一月『新青年』一〇巻一号に発表され、同年十二月、夢野久作『日本探偵小説全集』第一篇（夢野久作集）に収録された。

発表後の『新青年』誌上には江戸川乱歩（注二）、大下宇陀児（注三）、小酒井不木（注三）からの評価が寄せられた。

乱歩は「あの時代の九州の都会の地方色が、何と心憎いまでに出ている」ことを激賞し、その上で「錦絵や押絵」といった要素を評価する姿勢を見せた。宇陀児もまた本作を「近來になき快作」と評価した一方で、不木からは「押絵そのものが、怪奇の中心となつてはいない」との批判も受けている。

それぞれの評価はさておき、発表時から作品の舞台と

なった都市特有のモチーフが注目を集めていたことは確かだろう。では「押絵の奇蹟」はどのように分析されてきたか。

本作について、まず小林寿（注四）が夢野作品に通底する「ロマン」に着目した考察を行っている。「押絵の奇蹟」の研究として口火を切った論ではあったが、あくまでも作家論に留まっている感がある。

時代が平成に移ると、徐々に詳細な作品分析を行う論が現れる。千葉俊二（注五）は、本作を異常者であるトシ子から見た「現実」を語る物語だとし、不義密通といった異常事態を「浄瑠璃や八犬伝の世界の不合理性とも同質である」としている。千葉によつて典拠やモチーフへの言及はなされているものの、それらが用いられている意味を考察することなく、一律に「荒唐無稽」と切り捨

てている点は注意すべきだろう。

その後、東瑞恵^(注六)、山口俊雄^(注七)により、トシ子の手紙は〈妄想的〉、〈狂人の手記〉であり、トシ子は狂気を孕んだ人物として捉えられた。これらの指摘の根拠として、トシ子が八犬伝や〈法医学夜話〉といった〈物語的なもの〉、〈虚構〉である文献に遡っていることが示されているが、これらの文献について、やはり〈虚構〉だとするのみで、用いられることの効果について踏み込んだ議論はなされていない。

谷口基^(注八)は本作を探偵小説の視座から読み解く試みを行っており、その中で〈法医学夜話〉が実在しないとの指摘を行っている。

以上、研究史を簡単に整理した。これまで「押絵の奇蹟」は、作中の理論や書簡体形式に見出される不合理性や狂気から、〈異常者の物語〉、〈狂人の手記〉だと論じられる向きが多かった。一方、同時代評で注目を集めた都市特有のモチーフへの言及は少数に留まる。また、作品に取り込まれている典拠の分析にも検討の余地がある。

そこで本論では、これまで取りこぼされてきたモチーフと典拠の効果を考察し、「押絵の奇蹟」の新たな読みを提示する。具体的には黒田藩、押絵、歌舞伎座、上野の図書館といった伝統的なモチーフに着目し、その効果

を考える。また、典拠の分析を行い、古典作品を取り込む姿勢を指摘する。その上で夢野久作の作品史における「押絵の奇蹟」の位置づけを明らかにしたい。

二 第一の都市・福岡

本節では、トシ子が誕生から一六の年の春までを過ごした福岡について、黒田藩・押絵という二つの要素に着目しながら考察する。

二・一 黒田藩

まずはトシ子の生家・井ノ口家について確認しておく。井ノ口家は商人の町・博多と武士の町・福岡との間に挟まれた中洲に家を構える、黒田藩の〈お馬廻り五百石の家柄〉^(注九)であった。

トシ子の誕生は一八七九年だが、この頃は既に大政奉還により江戸幕府は崩壊し、華族・士族に対しては秩祿処分が下されていた。作中でもトシ子誕生の頃の井ノ口家は、武士としての収入が減少し、〈僅かばかり来る作米と漢学のお礼のほかはお母様の押し絵や針仕事〉で立てるほかない程、維新後の困窮に悩まされている。

維新後に困窮し、内職を行う武家は福岡県だけに

限ったことではないが、押絵で生計を立てている点に着目したい。この押絵は「博多おきあげ」と推察できるが（注一〇）、そもそも「博多おきあげ」は福岡の武家の子女のたしなみとして始まった文化であり、商品として流通することは無かった（注一一）。しかし、トシ子の父は押絵の仕事を次々に引き受ける。トシ子の母は押絵を金儲けのために作ることを嫌がっているものの、注文がある以上押絵作りに取り掛からざるを得ず、へお仕事の地獄に落ちていくことになる。

以上確認した通り、トシ子の生家・井ノ口家は、黒田藩の家柄、押絵作りという二つの要素を持つ家庭として描かれている。ではこれらの要素が作中でどのような効果を持っただろうか。

そもそも「押絵の奇蹟」における最大の事件、すなわちトシ子の母と中村半太夫の不義密通疑惑が、維新による井ノ口家の零落によることは間違いないだろう。

ここで維新前後の黒田藩の動きを確認しておく（注一二）。黒田藩は一八六五年に藩主・長博が勤王派の藩士に厳しい処分を下したのち、佐幕派として明治維新を迎える。維新から三年後の一八七〇年、日田県知事・松方正義が、福岡藩士により大規模に行われていた太政官札の贋造を告発した。調査に乗り出した明治政府が黒田藩に対し、旧藩勢力への見せしめを兼ねた厳格な処分を下したこと

により、藩は落ちぶれる。後の一八七七年には福岡の変と呼ばれる土族反乱を起こすなど、おおよそ政府に迎合するような態度とは言えなかった。

このような歴史と照らし合わせても井ノ口家の窮状が伺える。維新後の収入の減少に加え、頑固で昔気質な父はかつての自分を捨てて別の職に従事することに抵抗を抱いただろう。そのため、井ノ口家は母がたしなむ程度で行っていた押絵作りで生計を立てざるを得ず、その押絵作りによって半太夫と母に関わりが生まれ、後の家庭崩壊を導いてしまう。黒田藩に仕える家柄であったからこそ、「押絵の奇蹟」の物語が生まれていくのだ。

続いて、維新後の井ノ口家を支えた押絵の役割について明らかにする。

二・二 押絵

作中にはいくつかわ押絵が登場するが、本項では物語の中心に大きく関わる二枚の押絵——《阿古屋の琴責めの押絵》《大塚信乃の押絵》——を比較し、二つの共通点、相違点を確認する。表一に二つの押絵の特徴を整理している。

【表一】

比較項目	《阿古屋の琴責めの押絵》	《犬塚信乃の押絵》
制作時期	一八七九年二月	一八九一年春
依頼主	柴田忠兵衛	柴田忠兵衛
目的	娘の初節句祝い	《阿古屋の琴責めの押絵》の横に並べて飾る
題材	『壇浦兜軍記』より「阿古屋の琴責め」	『南総里見八犬伝』より「芳流閣の決闘」の場面
錦絵	なし	あり
モデル	阿古屋・中村半太夫	信乃トシ子 現ハトシ子の父
奉納場所	博多・櫛田神社	博多・櫛田神社

二つの押絵の共通点として、どちらも柴田忠兵衛からの依頼で制作されており、最終的に櫛田神社に奉納されたことがあげられる。

続いて相違点を見ていく。《阿古屋の琴責めの押絵》は、一八七九年二月に制作されており、錦絵は出てこない。また、『壇浦兜軍記』(注一三)の一場面である「阿古屋の琴責め」を題材とし、中村半太夫をモデルにしている。一方で《犬塚信乃の押絵》は、一八九一年春に制作され、中村珊玉(半太夫)の錦絵をもとに、『南総里見八犬伝』

(注一四)の一場面である「芳流閣の決闘」を題材とし、トシ子と父をモデルにしている。では、これらの押絵が作中でどのような役割を持っているのだろうか。

まずは《阿古屋の琴責めの押絵》について、本文中の記述を確認しよう。

「コヤツ(福岡の人は吾が児のことをよくこんなに申します)は俺のお祖母様の血すぢを引いとるらしい。今にあの阿古屋のやうに琴が上手になるぢやろう。引く手つきまでがあの押絵の通りぢや」とお父様がよく仰有ひました。

けれども不思議なことに、お父様の其様な事を仰有るたんびに、お母様は、はかどしく御返事をなさいませんでした。只、「エ、」とか「ハア」とか弱々しい返事をなすつて、あの淋しいやうな悲しいやうな微笑をなされながら、針や絵筆を動かしてお出でになるのです。時々眼の中に涙を溜めておいでになる事さへありました。

さて、『阿古屋の琴責めの押絵』に描かれている阿古屋のモデルが中村半太夫であることをふまえると、トシ子の琴を弾く手つきが阿古屋の押絵の通りであるという父の言葉は、半太夫とトシ子の血縁関係を示唆している

だろう。また、阿古屋を演じる役者には高い演奏技能が求められる。ゆえに、半太夫は琴の演奏に長けていたと予想できる。これにより、今後トシ子が琴の名手になると予想されているのも、トシ子が半太夫の能力を受け継いでいることを示している。

さらに後の場面では、トシ子が風呂場で鏡を見た時に、自分の顔が阿古屋の顔と酷似していることに気付いている。

これらのことから、『阿古屋の琴責めの押絵』は半太夫とトシ子に遺伝された性質がある、すなわち二人の間に血のつながりがあることを暗に示しているのだ。

続いて「阿古屋の琴責め」と「押絵の奇蹟」に見られる類似点を確認しておく。

まず、景清の行方を問われ、岩永に責め立てられる阿古屋の姿は、父に不義を問われ、詰問される母の姿と重なっている。

次に、この二作品には、それぞれに真偽が判定できない大きな謎が設定されている。順番に確認しておきたい。「阿古屋の琴責め」での大きな謎は「阿古屋が景清の行方を知っているのかどうか」である。「知らない」と主張する阿古屋に対して岩永や重忠は「知っているはずだ」と告白を求めるが、両者とも決定的な証拠はない。最終的には重忠が阿古屋の演奏を聞いた上で、彼女の主

張を真実だとして解放する。しかし、重忠の判断の根拠は「三曲の演奏に乱れが無い」という一点のみである。

「押絵の奇蹟」においての大きな謎は半太夫との不義密通疑惑である。これについて、母は「不義をした覚えはない」と主張し、父は「覚えがあるはずだ」と詰め寄る。半太夫の顔を写した『犬塚信乃の押絵』の顔がトシ子に似ていることを不義の証拠として指摘した父は、最終的に母の主張を退け、母とトシ子を斬り捨てる。このような真偽の判定ができない謎の存在に加え、詰問を受ける阿古屋とトシ子の母が、疑いを否定し、その上で死を望んでいる点も共通点とみなしてよいだろう。

このように「押絵の奇蹟」は、『阿古屋の琴責めの押絵』でトシ子と半太夫の血のつながりを匂わせるのみならず、その押絵の題材である「阿古屋の琴責め」の物語の構図や要素を取り込んでいることが確認できた。

続いて『犬塚信乃の押絵』について考察していく。

『犬塚信乃の押絵』について考えていたトシ子は岡沢の書斎にあった『八犬伝』の脚本を手に取り、読み進める。伏姫が八房に「身を触れずにみごもられた」という記述を見たトシ子は、驚き、自らの境遇と重ね合わせていく。さらに「八つ房」という犬の思ひ子となって生れた八犬士の身体には、その父の犬の身体についていた八つの斑紋が一ツずつ大きなほくろとなってあらわれて、親

子のしるしとなっていた」ことは、トシ子に「眼も眩むほどの奇蹟的な喜び」を与えることとなる。そしてトシ子はこの『八犬伝』の描写こそ、謎のままだった母の言葉——〈不義を致しましたおぼえは毛頭御座いませぬが……この上のお宮仕えはいたしかねます〉——の謎を解く手がかりではないかと考えるようになる。

また、トシ子は、数ある錦絵の中からわざわざ「芳流閣の決闘」の絵を選んだ母は伏姫と八房の話を知っていたはずだと考える。そして自身は母と半太夫が交わることなく生まれた子供であるという結論に至り、そのことを胸に秘めたままこの世を去った母の気高さに涙する。

では、『犬塚信乃の押絵』の役割について順を追って確認しておきたい。まず、この押絵はトシ子の父にトシ子と半太夫が酷似していることを気付かせた。続いて、確認してきた通り、トシ子に『八犬伝』への興味を持たせ、伏姫と八房の話を聞きつけを与えた。そのことによりトシ子は、母と半太夫の間には不義などなく、二人は一目で恋に落ち、そのことを胸に秘めて母は亡くなったといったのだと確信する。

『犬塚信乃の押絵』は、はじめにトシ子の母と半太夫の不義の証拠として登場するものの、のちに二人の間にやましい関係はなかったことの証左となる。この押絵は、物語の中で対立する役割を同時に背負っているのだ。

ここまで確認してきた通り、母と半太夫を出会わせたのは母が行う福岡伝統の押絵作りであり、黒田藩の家柄である井ノ口家の零落でもあった。つまり、福岡という都市は「押絵の奇蹟」における最大の事件——母と半太夫の不義密通——を引き起こすための必須の要素として働いている。黒田家と押絵という要素を持つ福岡であるからこそ、「押絵の奇蹟」の物語は起こり、展開していくことができるのだ。

続いてトシ子が一六歳で移り住む東京について考察していく。

三 第二の都市・東京

ここまで福岡という舞台について、黒田藩や押絵といった要素から考察してきた。続いて、トシ子が一六歳で移り住む東京という都市についての考察に移る。福岡から東京への移動が物語にどのような効果をもたらすのか、東京で登場する象徴的な場所に着目しながら分析していく。

三・一 歌舞伎座

まずは、歌舞伎座である。トシ子は上京後歌舞伎座を

訪れ、半太夫に直接確かめようと思いがちでも、日々を忙しなく過ごすうちに訪ねることなく一年が過ぎていった。岡沢夫妻に連れられて初めて歌舞伎座を訪れたころには、母の秘密を唯一知るであろう半太夫はすでに亡くなってしまっている。

しかしこの歌舞伎座への訪問をきっかけに、トシ子は〈歌舞伎時代〉という雑誌を手に取り、半太夫の息子・半次郎の存在を知ることになる。そして、雑誌を読む中で半次郎の洋服姿が〈お母様の変装かと思うほど〉母に似ていることに気付く、その不思議さに恐怖する。さらに公演に伴う半次郎の感想を読み、半太夫が母の作った押絵の意匠を大切にしていたことを知ったトシ子は、自分と半次郎が兄妹であり、半太夫が母を深く愛していたことを実感する。図らずも母と半太夫の不義密通を確信することになるのだ。

福岡に居た頃のトシ子は、井ノ口家の生計が母の押絵作りに依存していることや、ふとした時に悲しげにうつむく母の様子などに気付いているものの、母と半太夫の関係について確信を持ってはいない。トシ子が生まれた頃に流行りだした手毬唄についても、〈私のお父様は前にも申しますように色の黒い逞ましいお方で、どちらかと申せば醜男でおいでになったのに、お母様の方はまるでウラハラで、世にも珍らしく美しい方でしたので、い

ろいろな事を人が申しましたのも無理はない〉としているだけで、世間が噂する母と半太夫の不義密通について、真剣に受け止めている様子もない。

つまり、トシ子は東京に移り歌舞伎座を訪れることになって初めて、半次郎の存在、母と半太夫の関係について確信することになるのだ。トシ子に半次郎の存在を知らせ、母と半太夫の関係に疑念を抱かせるといったように、物語を進展させて新たな展開をもたらすために、舞台を東京に移し、歌舞伎座を訪れることが必要だったといえよう。

続いてトシ子が訪れる〈上野の図書館〉について考察を行う。

三・二 上野の図書館

二つ目の象徴的な場所である〈上野の図書館〉について、この場所を訪れたことよってトシ子がどのようにして母が無実であるという確信を得ることができたのか考察していく。

歌舞伎座で母と半太夫の間の深い愛情を知ったトシ子は、自らと半次郎が母と半太夫の間に生まれた兄妹なのではないかと考えるようになる。母の不義を疑う中、『八犬伝』の八房と伏姫の描写に出会ったトシ子は、そのよ

うなことが本当に有り得るのかどうかを確かめるため、毎日のように〈上野の図書館〉を訪れる。

この〈上野の図書館〉とは、どの図書館だろうか。本文より、トシ子が図書館を訪れていたのは一七歳の暑中休暇から音楽学校の卒業までの間である。トシ子が通っていた〈音楽学校〉は、東京音楽学校であるだろう（註一五）から、トシ子が在学していたのは一八九六年から一八九八年頃だと推察できる。よって〈上野の図書館〉とは、一八七二年に設立され、「上野図書館」の通称で親しまれていた東京図書館（註一六）であろう。

トシ子が通っていた頃の〈上野の図書館〉は東京図書館から帝国図書館への転換の時期であった。帝国図書館は開館に際し、その目的を〈内外古今ノ図書記録ヲ蒐集保存シ及衆庶ノ閲覧参考ノ用ニ供スル所トス〉（註一七）と定めており、トシ子をはじめとする庶民に対しても開かれた場であった。

〈上野の図書館〉で〈むずかしい産科の書物や心理学の書物を何十冊ほどめくら探りに〉読み進む中で、トシ子は何冊かの本の記述に目を留める。その内の〈遺伝の事を書いた書物〉には〈女の児は男親に似易く、男の児は女親に似易い〉ということ为例を挙げて証明した学理〉が書かれており、母の不義密通を裏付けるかのようなその記述に、トシ子は食事も喉を通らないほどうちの

めされる。

その後、気を取り直して図書館通いを再開したトシ子は、思いがけなく〈法医学夜話〉という名の書物を見つけ出す。そこには〈昔から今日までの間に、法医学上の問題になりました色々な不思議な出来事が昔風の文章で面白く書いて〉あり、トシ子はその中の〈妊娠奇談〉に目を留める。〈直接の父母以外の、他人に酷似せる子が、姦通の事実なくして生るる事ある〉という理論が具体的な事例と共に説明されており、トシ子はその理論を自らの境遇に当てはめる。母と半太夫は一目で恋に落ち、自分と半次郎は彼らが交わることなく生まれた子供なのだと確信することで、トシ子は絶望から抜け出す。

さて、トシ子は様々な書物の中から〈遺伝の事を書いた書物〉、〈法医学夜話〉の二冊を取り上げて紹介しているが、〈遺伝の事を書いた書物〉については内容の要約に留まっているのに対し、〈法医学夜話〉は、内容を引き写し、肌身離さず携帯しているなど、それぞれへの思い入れには明確な差が見られる。無論、母の無実の証明となる書物の方をより重んじるトシ子の態度は当然ともいえるのだが、一方で母の不義密通を裏付けるような〈遺伝の事を書いた書物〉にもわざわざ言及しているのはなぜだろうか。

そもそもトシ子による母の無実の証明には、常に信頼

性の揺らぎが付きまといっていることはこれまでも指摘されてきた。先行論では、手紙に見られる不義密通を示唆する描写^{〔註二八〕}をトシ子が見落としている（ないしは意図的に無視している）ことから、ひたすらに母を信じるトシ子を〈狂人〉であるとしてきた。しかし、トシ子が母をやみくもに信頼しているとは言えず、むしろ母への信と不信は二転三転している。福岡では母と半太夫に関する世間の噂を真剣に受け止めず、むしろ〈私がお母様の不義の子でないことをハッキリとたしかめる〉と意気込んでいたトシ子も、歌舞伎座を訪れ〈歌舞伎時代〉を読んだことで〈中村半次郎様と私とは、お話にきいた事のある夫婦児だったに違いない〉と絶望し、自らは〈不義者の子〉だと苦悩しはじめる。しかし『八犬伝』の言説に救われ、母の無実を信じ直す。

このように〈上野の図書館〉を訪れるまでも、母と半太夫の恋は姦通などではなく〈世にも上なく清浄なもの〉であってほしいという痛切な願いの中に、いくばくかの疑いが見え隠れしていることが伺える。母に対して疑いを抱きながらもその無実を信じたいトシ子は、〈法医学夜話〉の引用が恣意的なものと受け取られることを防ぐために、〈遺伝の事を書いた書物〉を取り上げたのではないか。つまり、あえて不義密通を裏付けるような書物についても言及し、その上でそれを打ち消すような

〈法医学夜話〉について重点的に記すことで、自らの証明が公平であることを担保しようとしたといえよう。

続いて無実の証明の主軸となる〈法医学夜話〉について詳しく考察していく。〈法医学夜話〉や〈石神刀文〉について調査した結果、そのような人物や書籍は見当たらなかった^{〔註二九〕}。一方で、この〈妊娠奇談〉については、「押絵の奇蹟」が発表される以前に、医学博士である小酒井不木が取り上げている。不木は「印象」（『新青年』一九二五年六月）にてギリシャの王妃の話を引き合いに出し、〈妊娠中に目撃した印象が、そのまま胎児にあらわれるという現象が、古来の文献に少なくありません〉としている。よって、〈法医学夜話〉の内容自体が創作ではないものの、〈石神刀文〉による〈法医学夜話〉という書籍は夢野久作による創作物、つまり架空の書物だと考えて良いだろう。

さて、このように現実では架空とみなすことのできる〈法医学夜話〉も、「押絵の奇蹟」の中では真実として取り扱われていることを確認しておきたい。〈上野の図書館〉、つまり帝国図書館に納入される本はその利用価値に応じて甲部・乙部・丙部の三種類に分類され、甲部のみを閲覧目録に載せるなど、利用者が手に取る本の選定には明確な基準が設けられていた。そのような中〈法医学夜話〉を閲覧できていることから、この書物は価値

のある書物としてみなされているのだ。

ここで、「押絵の奇蹟」における『八犬伝』の取り込みの問題とも併せて考える。

「阿古屋の琴責め」の物語の構図や要素を取り込んでいることは既に指摘したが、「押絵の奇蹟」は『八犬伝』も物語の下敷きとしていることが指摘できる。

先行研究においても八房と伏姫に関する指摘や、トシ子の手紙が妄想的に思える理由として『八犬伝』をあげるものが見られるものの、「押絵の奇蹟」と『八犬伝』との関わりについては言及に留まっている。

しかし、母と半太夫の関係には伏姫と八房の関係がふまえられている。加えて、トシ子が風呂場で鏡を見た際にその顔が半太夫や阿古屋、信乃、母の顔に似てくるという描写は、『八犬伝』において伏姫が八房と暮らす中、水面に映った自分の顔が犬に見えるという描写を下敷きとしているだろう。

このように「押絵の奇蹟」は『八犬伝』の構図を作中の重大な事件の核に据え、その他の要素も取り込んでいる。また『八犬伝』の書名や作者の名前、登場人物などを改変することなく用いている点も注目すべきである。「押絵の奇蹟」というオリジナル作品の中に、かつて馬琴が著した『八犬伝』は深く根ざしているのだ。

「押絵の奇蹟」には『八犬伝』の内容が、原典に忠実

に取り込まれている。一方で、『法医学夜話』という近代的な学説は、その作者・書名ともに存在を確認できない。では、このような書物を用いることにどのような意味があるだろうか。

ここで「押絵の奇蹟」において『法医学夜話』が『八犬伝』を補強するような形で用いられていることに注目したい。

『八犬伝』の言説を母の不義密通の問題に持ち込む上で、大きな障害となるのが信憑性の低さであろう。『八犬伝』成立時の医学は「押絵の奇蹟」発表時と比べると高度ではなく、その言説に科学的な信憑性を見出すことは難しい。

そこで、作中に『法医学上の問題になりました色々な不思議な出来事』を収めた書籍を登場させているのだ。

当然、現実の読者にとっては架空の書物だと判断することは難くなかっただろう。しかし、同じ『新青年』上に医学博士が掲載した近代的な学説を収め、その上書名に「法医学」とつける（注二〇）ことで、現実レベルでも『法医学夜話』に説得力を与えている。そのような『法医学夜話』を用いることで『八犬伝』の言説の裏付けが可能になっているのだ。

このように、「押絵の奇蹟」では『八犬伝』の言説を補強するために『法医学夜話』という架空の書物を用い

られている。夢野作品と『八犬伝』の関わりについては後ほど詳しく考察していくが、『八犬伝』に対するまなざしは並々ならぬものであったと指摘できよう。

では、なぜ〈上野の図書館〉である必要があったのか、〈法医学夜話〉は福岡で見つけることはできなかったのかという問題について考えてみたい。トシ子が福岡にいた頃、福岡の市民はどのような図書館を訪れることが出来たのか。表二にまとめている。

【表二】

図書館名	開設年	蔵書数
櫛田文庫	一八二八年	約五〇〇冊
桜井文庫	一八三〇年	不明 (神道・国学関連の書籍)
県立福岡博物館 書籍室(有料)	一八七八年	約七〇〇冊
福岡図書館	一九〇二年	約七〇〇〇冊
京都帝国大学福岡 医科大学 図書閲覧室	一九〇八年	不明(僅かな雑書・雑誌・新聞等)
福岡県立図書館	一九二五年	約二五〇〇冊

トシ子が福岡に居た頃、すなわち誕生(一八七九年)から一六歳(一八九五年)までの間に開かれていたかということや蔵書数、専門性などに着目して、いくつかの図書館を挙げている。この中で、トシ子が二六歳になるまでに開かれていたのは櫛田文庫(注三二)、桜井文庫(注三三)、県立福岡博物館書籍室(注三四)である。それぞれの施設について順番に確認していく。

櫛田文庫は町人に開かれた図書館であったが、蔵書数は少なく、櫛田神社の神官たちのための書籍が主であった。桜井文庫は櫛田文庫の創設に携わった国学者・青柳種信の尽力によって開かれ、主に神道と国学に関する書籍を収集した。県立福岡博物館書籍室は博物館併設の図書施設であったため有料であり、蔵書数も和洋合わせて七〇〇冊程度であった。これら三館については、トシ子が通うことも可能であったものの、〈法医学夜話〉のような先進的な医学書を手に入れるのに十分な蔵書数とはいえない。規模の大きな福岡図書館(注三四)や福岡県立図書館(注三五)、医学専門書の多い京都帝国大学福岡医科大学の図書閲覧室(注三六)などの蔵書には含まれていた可能性があるものの、どれも開設年が一九〇〇年代であり、既にトシ子は福岡を離れ東京での暮らしを始めてしまっている。

つまり、トシ子は〈上野の図書館〉へ通うことによつ

て、母と半太夫の不義密通という大きな謎について一つの答えを見つけることができたのだ。福岡にいた時でも『八犬伝』の話を知ることができただろうが、その当時の図書館では〈法医学夜話〉を見つけることは難しかっただろう。

舞台が東京に移り、〈上野の図書館〉を訪れたことで、トシ子は母の無実の証明となる学説と出会うことになるのだ。

ではここまでの東京という舞台にはどのような意味があるか、再度まとめておく。福岡でのトシ子は、兄・半次郎の存在や、母と半太夫の關係に確信を抱くことなく過ごしていた。しかし、上京し、歌舞伎座を訪れたことで初めてそれらに気付き、さらに上野の図書館を訪れたことで、福岡では手に入らなかったであろう学説を得ることが出来た。

以上のように、東京という土地に移ったことで、福岡で生まれた謎があらわになり説明されていく。これらの舞台は「押絵の奇蹟」の根幹を支え、物語を進める上で必須の要素となっているのだ。

また、〈上野の図書館〉で得た〈法医学夜話〉は架空の書物であり、『八犬伝』の言説を用いるために創作されていることを指摘した。続いて夢野作品における『八犬伝』との関わりについて論じていく。

四 『八犬伝』と夢野作品

ここまで、「押絵の奇蹟」において、〈法医学夜話〉のような架空の書物を用いて言説を補強しながら『八犬伝』を取り込んでいることを指摘してきた。続いては夢野の作品の中で『八犬伝』と関わりを持つ作品について確認しながら、夢野作品における「押絵の奇蹟」の位置づけを明らかにしていく。

四・一 馬琴に対するまなざし

まずは夢野の作品・エッセイの中の曲亭馬琴に関する記述について確認しておきたい。

アンケート「少年時代に愛読した小説とその感想」(『衆文』第二巻第一〇号 一九三四年一〇月)に対して、〈尋常小学校時代……八犬伝。伊呂波文庫。弓張月。挿画に釣られて読みました。現在のエロ、グロ、ナンセンス感はその時に萌芽していました。〉と回答しており、幼い頃から『八犬伝』に触れて育ったことが確認できる。

エッセイ「挿絵と闘った話」(『青柳喜兵衛筆神風連犬神博士 挿絵展覧会』一九三三年五月)では、「犬神博士」(『福岡日日新聞』一九三一年九月二三日)一九三二年一月二六日)の挿絵を担当した青柳喜兵衛に

ついで、〈青柳君も、馬琴の八犬伝を「俺の絵で売れるんだ」といった北斎ぐらいの自信は持っていたことでしょう〉とし、「創作人物の名前について」(『月刊探偵』第二巻第三号 一九三六年四月)では登場人物の名前を考える際の苦悩を語りながら〈馬琴などは石亀屋地団太(筆者注・正しくは石亀屋次団太)だの鼠川嘉治郎なんというのを平気で使っているが、今頃使ったら物笑いの程であろう〉とくさしている。「路傍の木乃伊」(『衆文』第二巻第九号 一九三四年五月)では中学時代の読書について〈漱石、蘆花、紅葉、馬琴、為永、大近松、世阿弥、デュマ、ポー、ホルムズ、一千一夜物語、イソップなど片端から読んだ〉としている。

このように夢野はエッセイや作品の中に幾度となく馬琴の名前を登場させており、『八犬伝』に関する言及も残している。幼い頃に『八犬伝』や馬琴の他作品に触れ、強く興味を抱いたことは間違いないだろう。

次に、「押絵の奇蹟」同様に『八犬伝』を取り込んだ作品である「犬神博士」(『福岡日日新聞』一九三一年九月二三日〜一九三二年一月二六日)、「ドグラ・マグラ」(書き下ろし単行本松柏館書店 一九三五年一月)、「二重心臓」(『オール讀物』一九三五年九月〜十一月)についての考察を行っていく。

四・二 「犬神博士」

夢野作品における「押絵の奇蹟」の位置づけを明らかにするために、『八犬伝』の取り込みという共通点を持つ「犬神博士」について考察していく。

「犬神博士」の主人公・チイについて見ていくと、チイの造形には『八犬伝』の犬士である信乃と毛野の二人がふまえられていることが指摘できる。チイと二人の共通点を確認していこう。

まず、チイと信乃の両親についてである。チイは両親について、〈俺の記憶にのこっている両親はドウやら本物の両親でないらしいから困るんだ。よくわからないが、どこかで棄子か何かになっている吾輩を拾い上げて育てたものらしい〉と語っており、自らには産みの親と育ての親の両方がいることを明かしている。信乃もまた、実の両親を亡くし、叔母夫婦に養育されていた。また、チイの養父母は〈手前の身体には金が掛かっているとか、生みの恩より育ての恩とか何とかいってはよく吾輩を打ったり叩いたり〉と、チイを虐待していた。信乃の叔母夫婦は、信乃が持つ村雨丸という宝刀を狙い、偽物とすり替えてしまう。このように、チイと信乃はどちらも育ての親に養育されており、親子関係が良好ではない。さらに、チイと毛野は親に芸人として育てられ、仕

込まれた芸を披露する生活を送っている点が共通している。

続いて、見た目においても共通点が見られる。チイは芸を仕込んだ養父母によって、信乃は丈夫に育つという言い伝えを信じた実母によって、毛野は母と共に女田楽の一座に入ったことによってそれぞれ女装で育てられた。またチイは〈立派な別嬪さん〉であり、優れた容姿を持っている。信乃の容姿については、八犬士の一人である親兵衛の父・房八の容貌が〈その面影は優美なる壮健なり 犬塚ぬしとよく似たり〉と評されており、そこから推察するに信乃もまた整った顔立ちをしていたといえる。毛野については〈態も姿も美しき〉と評され、女装姿での舞に人々が押し掛けるほど美麗だとされている。

さらに、チイは〈生れながらにして忠孝の志操〉を持つと評され、特に〈親孝行〉な子だと賞賛されている。ここには『八犬伝』においての八犬士たちが里見家に真摯に仕える忠義の心を持つ人物であり、信乃が〈孝〉の珠を持っていることがふまえられているだろう。このように「犬神博士」の主人公は『八犬伝』の犬士をモデルとして創作されている。

さて、「押絵の奇蹟」においてのみならず、「犬神博士」においても『八犬伝』が取り込まれていることが明らか

になった。さらに、「犬神博士」では『八犬伝』の登場人物をふまえつつも、独自のチイという主人公を創作しており、古典作品をそのままに取り込む「押絵の奇蹟」と比べると、取り込みの手法には大きな変化が見られていることは確かである。このような『八犬伝』の取り込みは「ドグラ・マグラ」へとつながっていく。

四・三 「ドグラ・マグラ」

続いて、『ドグラ・マグラ』に見られる『八犬伝』の取り込みについて考察していく^(注三七)。

「ドグラ・マグラ」における主題は医学博士の正木が研究する〈精神医学応用の犯罪〉であるのだが、そのメカニズムの説明に〈胎児の夢〉なる論文が用いられている。〈胎児の夢〉で主張されているのが、人間の細胞は、進化の過程や己の祖先の体験、その際の心理を反復し、その記憶が後世にも継承されていくという説である。

「押絵の奇蹟」と「ドグラ・マグラ」については、谷口基^(注三八)、松田祥平^(注三九)が「押絵の奇蹟」の〈法医学夜話〉の議論が「ドグラ・マグラ」の精神医学の理論の先駆けとなったことを指摘している。確かに〈法医学夜話〉の言説と「ドグラ・マグラ」における理論との間

には相当の類似点が見られる。しかし指摘した通り、《法医学夜話》はあくまでも『八犬伝』の言説を補強するために用いられている架空の書物であるのだから、『八犬伝』の言説に照らし合わせて「ドグラ・マグラ」との関係を見出す必要があるのではないか。

さて、『精神科学応用の犯罪』では〈一種の暗示作用によって、人間の精神状態を突然、別人のように急変化させ得る……その人間の現在の精神生活を一瞬間に打ち消して、その精神の奥底の深い処に潜在している、何代か前の祖先の性格と入れ換させ得る……〉といった理論が述べられており、その〈精神科学の原理〉が〈怪事件の前後を一貫して支配している〉としている。ここには、人間に備わった細胞の記憶を自在に呼び起こすことで犯罪を誘発するといった、精神の肉体に対する優位性が確認できる。このような精神の優位性という理念には、『八犬伝』における八房と伏姫の逸話がふまえられていると言えよう。八房と伏姫の間には何ら肉体的な結びつきはなかったのにもかかわらず、伏姫は八房と感応することです子を成す。すなわち『八犬伝』の中には肉体を退ける精神の優位性という言説が既に出現しており、その言説は「押絵の奇蹟」における《法医学夜話》で補強され、のち「ドグラ・マグラ」の《精神科学応用の犯罪》に取り込まれているのだ。

「犬神博士」での新たなキャラクターの造形に続き、「ドグラ・マグラ」では作品の根幹となる独自の理論のエッセンスとして『八犬伝』を利用する向きへと変わっていった。単純に『八犬伝』をなぞるだけでなく、独自性を付与しているという点で、取り込みの手法に変化が見られる。

一方、取り込み方は変化を見せているものの、「犬神博士」、「ドグラ・マグラ」はどちらも『八犬伝』影響下にあることを多分に匂わせていることには注意しておきたい。「犬神博士」では「犬」をそのままにタイトルに用いており、「ドグラ・マグラ」では『八犬伝』への言及がなされている(註三〇)。言説をなぞる向きから独自性を付与するまでに変わった取り込みであったが、『八犬伝』の存在は消し得なかったのか。次節で考察していく。

四・四 「二重心臓」

続いて、「二重心臓」における『八犬伝』の取り込みについての考察へ移る。

「二重心臓」の主人公である呉羽は女性として育てられた。その理由として〈老人の一人子は、その子供の性を反対に取扱って育てますと……女の児は男の児の通りに……又男の児は女の児の通りにして育てますと、無事

に成長させる事が出来る」という迷信が示されているが、この造形に八犬士の一人・信乃がふまえられていることは明白だ。述べてきた通り、信乃は元服まで性別を入れ替えて育てると丈夫に育つという言い伝えを信じた実母により、女性として育てられてきた。また、呉羽には女装で芸事を行う毛野のイメージも重ね合わされているだろう（注三二）。

さて、このように「二重心臓」もまた『八犬伝』を取り込んだ作品の一つであるが、これまで確認した「押絵の奇蹟」、「犬神博士」、「ドグラ・マグラ」と異なり、『八犬伝』への言及が一切なされていない点が特徴的である。「押絵の奇蹟」から始まった『八犬伝』の取り込みは、「犬神博士」、「ドグラ・マグラ」と時代を経ることに単純になぞる向きから、独自性を付与するまでに変化したことは述べてきた。そして「二重心臓」では明確な言及を避け、『八犬伝』を取り込んだ跡を消しているのだ。古典作品を下敷きとしながらも段階を踏んで独自性を確立してきた執筆方法は「二重心臓」で結実したといつてよいだろう。それは同時に、「押絵の奇蹟」が紛れもなく夢野久作作品における古典取り込みの嚆矢となる作品であったことを示しているのだ。

五 おわりに

ここまで、福岡と東京という二つの舞台に注目し、それぞれの土地ならではの要素の効果を明らかにしながら「押絵の奇蹟」について考察してきた。

まず、第一の舞台である福岡については、維新で困窮していた黒田藩の歴史に着目しながら、母の押絵作りに頼らざるを得ない状況が生まれていたことを確認した。

また、『阿古屋の琴責めの押絵』『犬塚信乃の押絵』の二つの押絵はトシ子と半太夫が酷似していることを示すだけでなく、母と半太夫の不義の証拠、さらには母の無実の証拠としても働いていることを示した。

続いて第二の舞台である東京については、歌舞伎座を訪れたことで半次郎の存在や母と半太夫の関係について知ることになり、さらに、上野の図書館を訪れたことで福岡では見つけられなかったであろう学説を得ることができたのだと結論付けた。また、「押絵の奇蹟」が古典作品を取り込んでいることを指摘した。

さらに、馬琴や『八犬伝』に関する夢野の興味を確認し、「犬神博士」、「ドグラ・マグラ」、「二重心臓」が「押絵の奇蹟」と同様に『八犬伝』を取り込んでいることを明らかにした。その上で「押絵の奇蹟」は夢野の古典作品を取り込む創作手法が芽吹いた作品であると結論付け

た。

このように「押絵の奇蹟」は、黒田藩や押絵、歌舞伎といった伝統的なモチーフと、東京音楽学校、上野図書館、西洋医学の学説といった近代的なモチーフの両方を取り扱っている。また、『南総里見八犬伝』をはじめとする古典作品を取り込み、それを物語の重要な位置に据えている。これらの点は夢野の後の作品——「犬神博士」、「ドグラ・マグラ」、「二重心臓」——に引き継がれていく流れを生み出している。「押絵の奇蹟」は初期の作品ではあるがすでに新たな方向性を拓いたといっている。中々重要視されては来なかった。しかし、古典作品を取り込む手法の先駆けであるのみならず、古典作品が物語構成と密接に関連し、効果的に機能している点で、より価値づけられる作品であるのだ。

注・参考文献

・本論を書くにあたって、『定本夢野久作全集』第一巻（国書刊行会 二〇一六年十一月）、第二巻（国書刊行会 二〇一七年五月）、第四巻（国書刊行会 二〇一八年四月）、第五巻（国書刊行会 二〇一八年九月）を底本とした。

【注】

- （注一）江戸川乱歩「押絵の奇蹟」読後」（『新青年』一〇巻二号 一九二九年二月）
- （注二）大下宇陀児「新年号創作感想」（『新青年』一〇巻二号 一九二九年二月）
- （注三）小酒井不木「新年号読後感」（『新青年』一〇巻二号 一九二九年二月）
- （注四）小林寿「浪漫の花——「押絵の奇蹟」論」（『みすてりい』第四号 一九六四年一〇月）
- （注五）千葉俊二「押絵の奇蹟」論——脳髓が描き出した夢」（『国文学』解釈と教材の研究」第三六巻三号 一九九一年三月）
- （注六）東瑞恵「押絵の奇蹟」論（特集・夢野久作）『新青年』趣味」第二二号 二〇〇五年十一月）
- （注七）山口俊雄「夢野久作「押絵の奇蹟」論「迷信・科学・文学」（『愛知県立大学文学部論集』第五七巻 二〇〇九年三月）
- （注八）谷口基「奇蹟の顕現を探偵する」（『変格探偵小説入門 奇想の遺産』岩波書店 二〇一三年八月）
- （注九）「福岡藩家中分限帳」（福岡県編『福岡県史資料』第九集 福岡県 一九三八年六月）に、「御馬廻組 五〇〇石 井上六之丞」との記載がある。馬廻の役職で五〇〇石の禄高を得るのはかなりの高給取りではあるが、それほど不自然な設定ではないだろう。一方で、トシ子の生家が東中洲に位置していた

ことには疑問が残る。武士の家柄でありながら商家の立ち並ぶ町に立地していることにも、零落との関係が見出せるのではないか。

(注一〇)「押絵雛を旅する」(湯原公造編『別冊太陽 布あそび——押絵の世界』平凡社 二〇〇四年一〇月)を参照した。

(注一一) (注一〇) 参照。

(注一二) 大蔵省理財局編『秩禄処分顛末略』(大蔵省理財局 一九二六年九月)、大蔵省編『明治前期』財政経済史料集成『第八卷(改造社 一九三三年五月)、福岡県編『福岡県史資料』第九集(福岡県 一九三八年六月)、安川巖『物語福岡藩史』文献出版 一九八五年一月)、平野邦雄・飯田久雄『福岡県の歴史』(山川出版社 一九八七年一月)等を参照。

(注一三)『壇浦兜軍記』(金桜堂 一八九一年八月)を参照。

(注一四) 曲亭馬琴作 小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝』(岩波書店 一九八五年一月)を参照。

(注一五) トシ子が一八九六年に入学していること、上野に設立されていること、主に西洋音楽を専門に学んでいたことから東京音楽学校と見るのが妥当であろう。

参照…堀内敬三『音楽明治百年史』(音楽之友社 一九六八年九月)、奥中康人『国家と音楽 伊澤修二がめざした日本近代』(春秋社 二〇〇八年三月)

(注一六) 現在東京上野公園内にある国立国会図書館国際子ども図書館の前身である。

参照…『国立国会図書館の沿革』(『国立国会図書館百科』 出版

ニュース社 一九八八年二月)

(注一七)「帝国図書館」(『上野図書館八十年略史』 国立国会図書館支部上野図書館 一九五三年三月)

(注一八) 山口論(注七参照)で指摘された(トシ子のあとに子が生まれなかったこと、産婆のオセキ婆さんが臨月の母の腹の大きいことを指摘したこと)。これに加え、半次郎が生まれた年に半太夫が博多を訪れたこと、その後半太夫が体調を崩したことなども不義密通の示唆といえよう。

(注一九)『帝国図書館和漢図書書名目録』第一篇～第五篇(帝国図書館 一九九九年二月～一九四四年三月) 他、帝国図書館発行の目録を調査したが該当なし。

(注二〇) 日本で「法医学」という言葉が誕生したのは一八九一年である。また『新青年』は一九二五年頃より、(モダン・ボーイのための教養主義の路線に舵を切り)はじめ、それに伴い「科学知識の体得が求められ」はじめていた(参照…加藤夢三『探偵小説の条件——小酒井不木と平林初之輔の「科学」観——』『文学・語学』二二三号 二〇二一年二月)ことから、

「法医学」と銘打つことで正当性の担保を試みたと言えよう。

(注二一) (注二六)『近代日本図書館の歩み 地方篇——日本図書館協会創立百年記念』(日本図書館協会 一九九二年三月)

(注二七) 本稿における「ドグラ・マグラ」の表記について、「ド

グラ・マグラ」は単行本名を「ドグラ・マグラ」は作品名を指す。

(注二八) (注八) 参照。

(注二九) 松田祥平「撞着する思想と形式——夢野久作『ドグラ・

マグラ』を中心として——『大衆文化』二四号 二〇二一年三月)

(注三〇) 隣室の美少女を美しいと思うか尋ねられて答えに窮した〈私〉に、正木が〈フーム……そうだろう……そうだろう。

あの少女が美しいかどうかと訊かれて平気で返事の出来る青年は、恋愛遊戯に疲れた不良連中か、又は八大伝や水滸伝に出て来る性的不能患者の後裔だからね……」と語る。

(注三一) 「犬神博士」のチイも女装で育てられたが、チイと呉羽との明確な差は本人の性自認にある。自分を女性だと思い込んでゐる宿の亭主に対して〈吾輩が男であることをわからせてビックリさせたら、どんなにか愉快だろう〉と語り、〈ワテエ男さがなハハハ……〉と笑うチイの性自認は男性である。一方、呉羽は美鳥に出会うまで〈私自身でも、自分が男だか、女だかわからない位、声から姿までも……心までも女らしくなつてゐる。

【参考文献】

- ・金子堅太郎『黒田如水伝』(博文館 一九二六年三月)
- ・藤懸静也『浮世絵』(雄山閣 一九二四年六月)
- ・武居権内『日本図書館学史序説』(理想社 一九六〇年三月)
- ・岡本雅享「福岡県における近代図書館の嚆矢——福岡図書館の

設立背景」(『福岡県立大学人間社会学部紀要』第二八巻第二号 二〇二〇年二月)

本稿は二〇二二年度尾道市立大学日本文学会大会での発表資料をもとに加筆修正を行ったものである。

—むらかみ・ひかり 日本文学科三年生—

『尾道市立大学日本文学論叢』第17号目次（令和3年12月）

語りと文藝

令和二年度卒業論文題目

旭堂南海さん講談「明智光秀」について

藤沢 毅

令和二年度三年生研究発表会発表題目

彙報

講談「明智光秀」

旭堂 南海

創作

フォトグラフィス

中山 美紅

「光さす庭」

谷坂 利香

研究論文

『温故抄』を読む

藤川 功和

坂口安吾「残酷な遊戯」論

原 卓史

——鬼熊事件との関連について——